
拉ぐ色

愛威慈郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

拉ぐ色

【Zコード】

Z5129L

【作者名】

愛威慈郎

【あらすじ】

知つてゐる、ただの細胞なんだろ。

砂の上を泳いだ時の話

雲を間近に感じたのは

誰もが可笑しいと言つけれど

今ならどうにでもなる気がした

膨大な時間を前にしても

その歪な冷たさが変に心地好かつたんだ

身体が保ってきた熱よりも

体温が教えてくれた

血中の酸素が溶けていくのを

差し詰めアイツは神か虫けら

君が月なら僕は赤血球

するといツは湿つた涙腺

君は毛虫で僕は雨

頭のあらゆる隙間を

不必要なガスが埋めていく

訃報を伝えるアナウンサーの声が
鼓膜の内側で何度も反響した

そいつの声と

外を走る車輪の音がつるわくて

気づけば涎を啜ることを忘れてる

誰もが遠くで蔑むけれど

それを僕だと知ったのは

寒い夜の急な階段、

冷たいコンクリートの上だった

病的に繰り返すんだ

その時の僕に重い酸素は必要ない

自我を喪失する寸前

そこでは奴が笑ってる

甲高い笑い声で僕を促す

「おい、垂れてるぞ」

あ、

涎を啜るの忘れてたよ

何度もだつて言つよ

君は君で僕は僕

するとアソシはふざけてこいつ言つ

あの子が白血球ならお前は赤血球

そして俺は例えば人間

瞼の下

瞳の淵

黒眼か白眼

毛細血管

空を仰いで

何をみてる?

ただ冷たいだけの

灰色の地面に

おぼれて。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5129/>

拉ぐ色

2010年10月11日01時38分発行